

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第421次発掘調査報告書 —

2020

姫路市教育委員会

序

姫路市の中心部に位置する世界遺産・国宝姫路城は、別名「白鷺城」とも呼ばれ、関ヶ原合戦の功により播磨 52 万石の大名になった池田輝政が、慶長 6 年（1601）から同 14 年にかけて主要部を築いた平山城です。標高 45.5m の姫山に本丸が配置され、周辺の武家屋敷や町屋などを含めて城下町全体が内堀・中堀・外堀の三重の堀で囲まれていました。このたび、発掘調査を行った古二階町は、外堀と中堀の間に挟まれた外曲輪に位置し、主に町屋として利用されていました。

姫路市の中心部は昭和 20 年（1945）の姫路大空襲により壊滅し、戦後に施行された土地区画整理に伴い市街化が進んできましたが、近年の発掘調査により城下町の遺構が地中に良好な状態で残存していることが明らかになりつつあります。今回の調査で見つかった町屋の屋敷境等の遺構及び遺物は姫路城下町の成立及び変遷を解明する上で貴重な資料です。ここにその成果を報告し、今後の調査・研究の進展に資する所存です。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました事業者様をはじめ関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

令和 2 年（2020 年）3 月

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例言・凡例

1. 本書は、姫路市古二階町77番地において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、和田興産株式会社から委託を受け姫路市教育委員会が実施した。調査は姫路市埋蔵文化財センターの南憲和・山下大輝が担当した。報告書の執筆・編集は南が行った。
3. 発掘調査に関する写真・図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4. 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系V系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
5. 土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
6. 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課発行『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』(2010)に依拠した。

目次

第1章	はじめに	1
第2章	調査の成果	
第1節	調査の概要	1
第2節	近世(城下町段階)の遺構・遺物	2
第3節	近世以前の遺構・遺物	5
第3章	総括	5

挿図・挿表目次

図1	調査区割図	図4	SD01・SD02平・断面図
図2	SK76周辺土層断面図	図5	第354次調査との合成図
図3	SK76出土遺物	表1	出土遺物観察表

図版目次

図版1	調査地位置図	／石組2断面図	
図版2	調査区全体図(近世) ／西区東西トレンチ土層断面図	／石組1(石組2との交差部)立面図 ／石組2開口部断面図	
図版3	西区北壁・西壁土層断面図 ／東区西壁土層断面図	／石組2下部出土遺物	
図版4	石組1平・断・立面図	図版8	SK20・SK25出土遺物
図版5	石組1下層遺構平面図／礎石列平面図 礎石列断面図／SA01平・断面図 ／SA02平・断面図	図版9	SK79・SK87・SK88・SK120・SK122 SK123・西区南端トレンチ出土遺物
図版6	石組1・2(最上段)平面図 ／石組2(基底部)平面図 ／石組2完掘状況平面図	図版10	遺構写真(1)
図版7	西区南壁土層断面図 ／石組2の西区南壁土層断面投影図	図版11	遺構写真(2)
		図版12	遺構写真(3)
		図版13	遺構写真(4)
		図版14	遺構写真(5)
		図版15	遺構写真(6)

第1章 はじめに

姫路市古二階町7番他において共同住宅の建築工事が計画された。計画地が姫路城域下町跡（県遺跡番号020169）に該当することから、文化財保護法第93条の規定に基づき事業者から平成30年11月16日付で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。姫路市教育委員会では遺構等の残存状況を把握するため、平成31年1月15日、2月27日に確認調査（調査番号：20180391）を行った結果、遺構及び遺物を検出した。これを受けて事業者と協議を行い、施工により遺跡の破壊を免れることができない316㎡を対象に本発掘調査を実施することになった。

調査は確認調査の結果に基づき、東区（153㎡）では1面調査、西区（163㎡）では2面調査として実施した。また、調査等の安全を確保するために土留めを設置する範囲を先行して調査し、その施工後に東区、西区の順に調査を進めた（図1）。先行調査を含め現地調査（調査番号：20190074）に要した期間は、平成31年4月2日から令和元年6月28日であった。現地調査終了後、整理作業及び報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査の開始から報告書の刊行までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会	文化財課	埋蔵文化財センター
教育長 松田克彦	課長 花幡和宏	館長 前田光則
教育次長 坂田基秀	課長補佐 大谷輝彦	課長補佐 岡崎政俊（庶務）
生涯学習部	技術主任 関 梓	係長 森 恒裕（調整）
部長 沖塩宏明		技術主任 南 憲和（調査・整理）
		技師補 山下大輝（調査）

第2章 調査の成果

第1節 調査の概要

姫路市の中心部に位置する姫路城は、関ヶ原合戦の功により播磨52万石の大名になった池田輝政が、慶長6年（1601）から同14年にかけて築いた平山城である。

調査地は姫路城の外曲輪に該当し、城下町絵図等の史料によると惣社門から約200m南に位置する（図版1）。池田氏及び一次本多氏時代の外曲輪の様相は不明であるが、一次榊原氏時代（1649～67）には調査地付近に「小二階町」とみえ、町屋であった可能性が高い。二次本多氏時代（1682～1704）には北東部の一部が「正善寺」の境内に含まれる可能性があるが、基本的には町屋として幕末まで継続したとみられる。

現況地盤は標高12.9m前後であるが、12.3～12.5mで礎石（間知石を含む）を検出した（図版7）。これより上位には姫路大空襲時の戦災焼土層が存在するため、この高さが近代に継続する遺構面と考えられる。標高12.1m前後では城下町建設以前とみられる耕土（約20cm）が部分的に残存しており、11.9mで黄橙色シルト質粘土の地山に達した（図版3・11）。今回の調査では主に近世（城下町段階）の遺構を1面目とし、近世以前の遺構を2面目として把握した。近世（城下町段階）の遺構としては屋敷境の石組1・2、礎石（列）、柱穴列2条（SA01・02）、土坑126基（SK01～126）、井戸3基（SE01～03）等（図版2・10～12）を、近世以前の遺構としては溝2条（SD01・02）を検出した（図4・図版15）。



図1 調査区割図

第2節 近世（城下町段階）の遺構・遺物

主要な遺構・遺物について報告する。

(1) 屋敷境の石組

西区で検出した南北方向（N-5° -E）に延びるものを石組1、西区南端トレンチのほぼ全域で検出した東西方向（N-82.5° -W）に延びるものを石組2とした。両者が交差する部分では石組1が連続して延びており、石組1が石組2に後出するとみられる。

石組1（図版4・13・14） SK79、SK87、SK105、SK120、SK122、SK123等に後出する。20～30cmの間隔で並行する2列の石組からなり、互いに内側に面をもつことから溝状を呈する。石組のうち西側は調査区南端からの検出長11.4m、東側は12.2mを測り、それより北では石組が不明瞭になる。西側は基本的に3～4石程度（最大0.8m）を積み上げるが、東側は1～2段程度で、調査区南端から7.2m以北では比較的大振りの石の長辺を面を揃えて配置するのみで段積みしていない。最上段の石の上面は平坦であり、西側では標高12.3mと12.4m、東側では12.3mで高さを揃える意識が認められた。

西側の石組は石組2との交差部から8.2m付近まで（以下、石組1西a）は標高11.7～11.9mの基底部から3～4段積み上げるが、そこから北に0.9mの範囲（以下、石組1西b）では基底部が12.1m前後と浅くなり、段数も1～2段に減じる。その北から1.5mの間（以下、石組1西c、図版4の断面dライン付近まで）は再び11.9m前後の基底部から2～3段積み上げる。石組1西c以北でも12.05m前後を基底部とする石が連続するが、平面プランにおいて外側（西）にずれた位置に断続的に並ぶことから、石組1と一連になるものとは断定できなかった。石材の規模は一边20～40cm程度で、基本的に面を有す。間知石は含まれない。石材の隙間には小石を詰めて積み上げている。石組1西aでは最下段に長辺50～70cm程度の大振りの石を据え、最上段に扁平な石を使用している箇所がある。その構築過程では目地を通す意識は認められず、丸味を帯び明確な面を持たない石を中段に使用している箇所や、石材間の空隙が大きく上下の石が十分に接していない箇所が存在する。石組1西cでは中段に丸味を帯びた石材を多く使用し、最上段に扁平な石を配置する。石組1西a～cの基底部の石の下部に鋼木等を敷いた痕跡は確認されなかった。

断面観察（図版2の断面Dライン、図版4の断面dライン）の結果、西側の石組を構築した後、東側に盛土を行い、東側の石組を設置することで、最終的には東西の石組が正対し溝状を呈していたことが明らかになった。正対する石組間の埋土からガラス製品等が出土したことから、近現代では石組が並行していたと考えられる。

石組1の下層遺構として礎石列1条、柱穴2条（SA01・02）、石列1を検出した（図版5・14）。

礎石列は西区南端から南北方向（N-2° -E）に延び、検出長4.8m（5間）を測る。礎石の規模は長辺20～35cmで周囲を小石で根固めする。礎石間の芯々距離は北から3間までは0.92m、0.92m、1.06mを測り、根固め石のみが残る箇所を経て南端の礎石に至る。残りの2間は0.99m前後、0.91m前後と推測される。

SA01は礎石列の下層で検出した。径25～45cmの柱穴（SP28-SP30-SP33-SP34）が南北方向（N-3° -E）に並び、延長は3.08mを測る。4基のうち3基に根石を有す。石組1の断面eライン（図版4・13）では城下町建設以前の耕土（図版4の断面eラインの9層）を切り込むことを確認した。SP28から土師器細片が出土したが、時期は不明である。

SA02はSA01の北端から5.1m離れた位置で検出した。径16～50cmの柱穴群（SP15～26・SP36）が南北方向（N-約1° -E）に延長4.25m連続する。13基のうち5基に根石・根固め石が遺存していた。遺物はSP15・16から染付磁器や瓦の細片、SP23から炮烙の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。

石列1はSA01とSA02の間で検出した。径10cm程度の小振りの石が南北方向に4.2m並んでおり、石組1の断面dライン（図版4・13）の6層に伴う。

これらのうちSA01・SA02は石組1に先行する土坑群との切合い関係がほとんど認められず、石組1以前の屋敷境関連の遺構である可能性を指摘できる。

石組2 (図版6・7・9・15) 東西9.4mにわたって検出した。両端は攪乱により失われるが、その掘方とみられる土層 (図版7の西区南壁土層断面図の6層) は調査区の屈曲点⑧-⑨間まで続いており、東端はさらに東に続く可能性がある。石材は2～3段程度 (最大0.5m) 積み上げられており、上段の石は南に面を向ける。最上段の石は標高12.5mで検出した。調査区南壁には同じレベルで間知石が北 (石組2側) に面を向けた状態で東西方向に並んでおり、石組2と間知石の間隔が約40cmを測ることから近代以降は石組が正対し溝状を呈していた可能性がある。石組1との交差部から5.3m東に幅60cmの開口部があり、この部分では石が東西に正対して配置される。基底部は開口部付近で標高11.6mを測る。石列1との交差部から西は浅く、断面aラインでは標高12.2mであった (図版7・15)。石組1との交差部では石組1の西側がそのまま連続し石組2の南面まで達する (図版15)。石材の規模は石組1と大差は無く、間知石は含まれない。開口部から東では上面が平坦な石の長辺を軸線に揃えて配置する箇所が存在する。石組の基底部には長径40～50cm程度の大振りの石だけでなく、長径20cm程度のやや小振りの石も目立ち、個々の石は明瞭な面を持たず丸味を帯びるものが多い。基底石としては隣接する石材との空隙を詰めて配置する意識は乏しいと感じられた。このため、少なくとも石組1西aのように基底部から面を揃えて積み上げるような造作では無かったとみられる。基底石の下部に胴木等を敷いた痕跡は確認されなかった。

遺物は石組2の下部から白磁皿 (図版7-3。以下、遺物番号は通し番号のみ記載する。)、肥前系施釉陶器皿 (4)、軒平瓦 (5) が出土した。3は中国製で15世紀後葉から16世紀前葉、4は16世紀末頃のものであるが、遺物の出土量は少なく、石組2周辺の土坑等から混入した可能性もあり、この遺構の構築時期を示すものとは断定しがたい (注1)。また、石組2の北側から機械掘削中に備前焼大甕 (58) が出土した。

(2) 土坑

SK20 (図版3・4・8・10) 西区西端で検出した。南北2.3m、東西0.8m以上を測る。遺物は染付磁器碗 (6)、軒平瓦 (7) が出土した。

SK25 (図版2・8・10) 西区北端で検出した。南北1.3m以上、東西1.3m、検出面からの深さは44cmを測る。基底部には炭が堆積していた。遺物は土師器皿 (8～10)、瀬戸美濃焼菊皿 (11)、青花小碗 (12)・碗 (13)・鉢 (14)、施釉陶器碗 (15)、肥前系施釉陶器碗 (16)・碗 (17)・皿 (18・19)・大皿 (20)、軟質施釉陶器碗 (21)、炮烙 (22)、陶器播鉢 (23)、丹波焼播鉢 (24・25)、備前焼甕 (26)、羽輪口 (27)、埴塙 (28～30)、備前焼葉研車 (31) のほか鉄滓が1.91kg出土した。19の皿には砂目痕が残る。また、28～30には酸化銅とみられる融着物が付着しており、27や鉄滓の出土を踏まえると生産関連の道具を生活雑器とともに廃棄した可能性がある。遺物組成から、本遺構は17世紀前葉頃に比定できる。

SK76 (図2・3・図版2・15) 西区の北部で検出した。南北0.9m、東西1.2m以上、検出面からの深さは37cmを測る。遺物は土師器皿 (1・2) が出土



図2 SK76周辺土層断面図

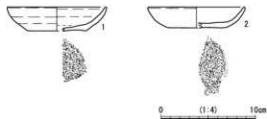


図3 SK76出土遺物

した。埋没後に暗灰黄色細砂(図2-2層)により20~30cm盛土され、礎石が据えられていた。礎石の上面は標高12.2mを測る。

石組1の時期比定に関連する土坑(図版4・5・9・13・14) 遺物が一定量出土したSK79、SK87、SK88、SK90、SK105、SK120、SK122、SK123について報告する。

SK79は石組1に先行する。SK120を切り、石組1の断面dラインで確認した結果、石列1に後出する(図版4・13)。遺物は備前焼播鉢(32)が出土した。32は高台が付くタイプで17世紀第4四半期から18世紀前葉頃のものと思われる。

SK87は石組1に先行する。SK88に切られる。遺物は土師器皿(33)、施釉陶器碗(34)、染付磁器碗(35)・徳利(36)が出土した。34は京・信楽焼系とみられる。

SK88はSK87、SK122を切り、SK90に切られる。遺物は陶器灯明皿(37)・碗(38・39)・片口鉢(40)・壺(41)、染付磁器仏飯具(42)・小碗(43)・碗(44・45)、関西系焼締陶器播鉢(46)が出土した。これらの時期は18世紀前半から中頃とみられる。

SK90はSK88、SK122を切る。遺物は底部に「東」の銘があり東山焼とみられる染付磁器徳利や行平鍋が出土した。これらは19世紀代のものである。

SK105は石組1及び石列1に先行する。遺物は施釉陶器の刷毛目大皿・灯明皿、染付磁器のくらわんか碗、炮烙など17世紀末から18世紀代のもので出土した。

SK120は石組1に先行する。SK79、SK83に切られる。遺物は焼塩壺(47)、石製硯(48)が出土した。

SK122は石組1に先行する。SK88、SK90に切られる。遺物は施釉陶器碗(49)、染付磁器碗(50~52)、白磁徳利(53)、炮烙(54)が出土した。17世紀後半から18世紀前半頃のものと思われる。

SK123は石組1に先行する。遺物は施釉陶器碗(55)、染付磁器碗(56)、陶器播鉢(57)のほか、斜め放射状の播目を施す備前焼播鉢、瀬戸美濃焼志野皿、一重網手文の染付磁器があり、17世紀末以降と17世紀前半頃の遺物が出土した。

以上のとおり、石組1に先行する土坑群の出土遺物に染付磁器の広東碗や端反碗等が含まれないことから、その下限は18世紀中葉と押えられ、石組1は18世紀後葉以降に構築されたと考えられる。また、その下層遺構である石列1は17世紀末頃から石組1を構築するまでの間に作られたと位置づけられる。

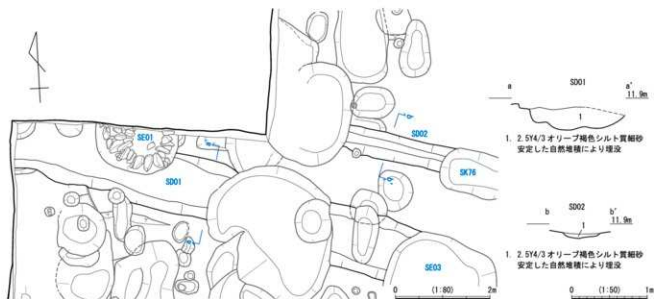


図4 SD01・SD02平・断面図

(3) 井戸

SE01～03 (図版2・10) SE01、SE03は西区、SE02は東区で検出した。前者2基は石組み井戸である。これらの井戸側内からは近代以降の製品が出土しており、比較的近年まで使用されていた可能性が高い。

第3節 近世以前の遺構・遺物

(1) 溝

SD01 (図4・図版3・15) 西区の北部で検出した。主軸方向N-70°-Wで直線的に伸び、西端は調査区外に続き、東端はSE03に切られる。検出長は8.6mで、幅約1.3m、検出面からの深さは30cmを測る。断面は浅い碗状を呈す。遺物は出土しなかった。

SD02 (図4・図版15) SD01の約1.1m北で検出した。主軸方向N-73°-Wで直線的に伸び、両端は近世の土坑に切られる。検出長は2.3mで、幅約0.5m、検出面からの深さは6cmを測る。遺物は外面にハケメを有す土師器の細片が出土した。

第3章 総括

主な調査成果を以下のとおり整理し、まとめたい。

- ① 調査地は絵図等の史料によると、一次榊原氏時代(1649～67)以降は基本的に町屋として幕末まで継続したとみられる。それ以前の17世紀前半頃の遺構としてはSK25を検出した。SK25からは生活雑器とともに輪羽口・増場・鉄滓等の生産関連の遺物が出土した。
- ② 絵図と対照すれば、調査地は「小二階町」の町屋区画の南半にあたり、土坑が集中して検出された。北半(調査区外)には街路に面して建物が存在したと想定される。
- ③ 調査地の15m南の「伽屋町」で行われた第354次調査(註2)の成果と合成すると、屋敷境の石組2は伽屋町の町屋の屋敷境と直交関係にあることが判明し、その開口部は伽屋町の屋敷境の延長線上に位置すると推定される(図5)。これらの状況からみて、石組2は伽屋町と小二階町の境界を兼ねていた可能性がある。また、石組2に取り付く屋敷境の石組1は18世紀後葉以降に構築されたと考えられる。石組1は西側から盛土され、近現代には石組が正対し一対の溝状を呈していた。その下層では礎石列・柱穴列が検出された。これらは遺構の空地に位置することから、屋敷境の前身遺構の可能性があると考えられる。

(註1) 17世紀前半以前の遺物は西区南端トレンチの南西部やSK123からも出土している。

(註2) 姫路市教育委員会 2017『姫路城域下町跡—姫路城跡第354次発掘調査報告書—』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第49巻

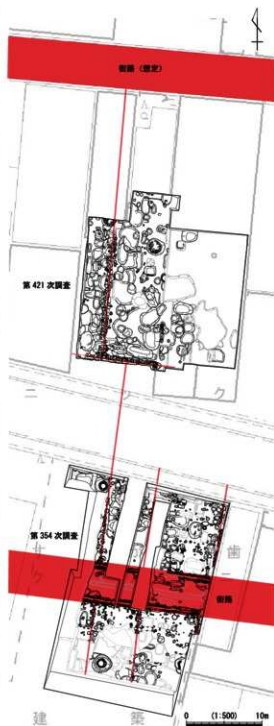
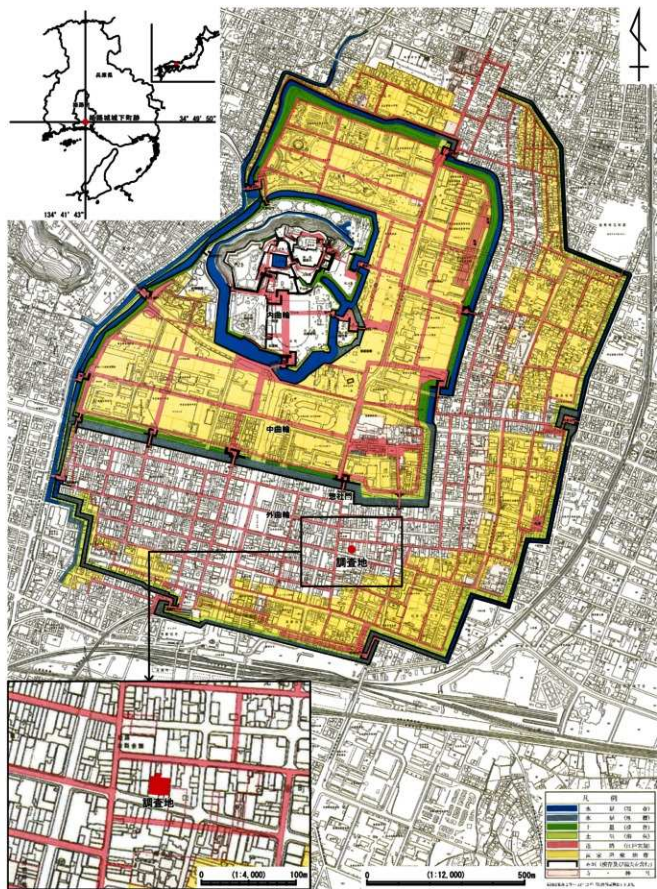


図5 第354次調査との合成図

番号	遺構等	種別	器種	口径(長さ)	器高(高さ)	最大径	底径(幅)	色調	現状存数	備考
1	5876	土師器	甕	(10.3)	2.6		(6.2)	2.5Y8/4黄	底面3/4	底面未切り
2	5876	土師器	甕	(10.2)	2.2		(6.4)	10YR7/3にぶい黄橙	口縁1/3	底面に木目状の平行線
3	右縁2下部	白磁	甕	(13.7)	2.9		(8.1)	5Y8/1灰白(藍色)	口縁1/3	甕付を除き全輪、中国製。
4	右縁2下部	灰輪陶器	甕		残3.3		(4.0)	2.5G7/1明オリーブ灰(藍色)	底面完全	見込みに粘土目3箇所、体部下平無輪、肥前産。
5	右縁2下部	瓦	軒平瓦	残6.1	5.6			N3.0曜灰	瓦当1/2	瓦当文様は中心彫りでは二等で垂下と中心彫りの間から集した階卓が2反転する。
6	5829	染付磁器	甕	10.6	5.0		4.1	5G7/1灰白(藍色)	口縁2/3	肥下目録参照。甕付を除き全輪、甕付に砂付着。くろわんか陶。
7	5829	瓦	軒平瓦	残6.5	4.2			N4.0灰色	瓦当1/2	中心彫り(意匠不明)から2反転する階卓となる上面に指込から裏面した凸縁。文様上面に水平方向に書く明かな指線。瓦当裏面の平反合部にリコナア。
8	5825	土師器	甕	10.9	2.4		8.0	2.5Y7/4黄	口縁3/5	底面未切り、有明蓋
9	5825	土師器	甕	8.7	1.7		6.3	7.5Y8/5にぶい黄	口縁3/4	底面未切り、有明蓋
10	5825	土師器	甕	10.6	2.1			7.5Y8/7にぶい黄	口縁3/5	てづくね、有明蓋
11	5825	灰輪陶器	甕	(12.1)	3.2		(7.7)	5Y8/1灰白(藍色)	底面1/4	甕付を除き全輪、瀬戸美濃焼産。
12	5825	青花	小甕	(6.6)	4.0		2.4	5Y8/1明青灰(藍色)	底面部分	甕付を除き全輪
13	5825	青花	小甕	(6.6)	4.9		(4.6)	10Y8/1灰白(藍色)	底面部分	甕付を除き全輪
14	5825	青花	鉢	(14.1)	残2.2			9B.0灰白(藍色)	口縁1/8	口縁が青花、口縁部の青花は外面の唐草文様と対応する。
15	5825	灰輪陶器	甕	残7.2	4.5		5Y7/1灰白(藍色)	底面完全	高台内無輪	
16	5825	灰輪陶器	甕	残5.6	3.8		5Y3/2オリーブ黒(藍色)	底面完全	緑緑輪、体部下平無輪、肥前産。	
17	5825	灰輪陶器	甕	10.6	6.9		4.1	10Y8/2黒帯(藍色)	口縁1/2	体部下平無輪、肥前産。
18	5825	灰輪陶器	甕	残3.3	4.2		10Y8/3オリーブ黄(藍色)	底面完全	体部下平無輪、内外面及縁面に傷付着、肥前産。	
19	5825	灰輪陶器	甕	残2.2	4.3		5Y6/3オリーブ黄(藍色)	底面完全	見込み・高台に目録(砂目)、肥前産。	
20	5825	灰質灰輪陶器	大甕	(26.8)	8.6		7.9	10Y8/3黒帯(藍色)	底面部分	見込みに首筋3箇所(粘土目)、外面口縁部を除き全輪、肥前産。
21	5825	灰質灰輪陶器	甕	(9.8)	残4.0			5Y8/1灰白(藍色)	口縁1/7	細い貫入が目立つ、輪が壊れる。
22	5825	土師器	甕	残5.0	(37.0)			7.5Y8/5にぶい黄	口縁1/6	体部に平行タテキ
23	5825	陶器	楕鉢	(33.4)	残10.9		(35.2)	2.5Y8/5にぶい黄	口縁1/7	
24	5825	焼締陶器	楕鉢	(29.7)	残5.2			7.5Y8/5にぶい黄	口縁1/8	一本引きの楕鉢。丹波焼。
25	5825	焼締陶器	楕鉢	残11.0				5Y8/4にぶい黄	口縁1/10	6条1單位の楕鉢。丹波焼。
26	5825	焼締陶器	甕	残21.0				2.5Y8/4赤帯	口縁1/10	楕鉢焼
27	5825	土製品	輪郭口	(7.5)	残4.3			10Y8/3黄黄橙	口縁1/4	鎌倉物が付着
28	5825	土製品	輪郭	4.2	2.2			9B.0灰	口縁3/4	酸化銅(α)付着
29	5825	土製品	埴輪	6.6	3.8			2.5Y7/2灰黄	完全	酸化銅(α)付着
30	5825	土製品	埴輪	(15.1)	残6.7			5Y8/1黄灰	口縁1/4	酸化銅(α)付着
31	5825	焼締陶器	壺形罐	20.7	2.8		20.6	5Y8/1黄灰	完全	中心に径2.1cmの穿孔。備前焼。
32	5879	焼締陶器	楕鉢	32.3	14.4	33.3	15.8	10Y8/6赤	口径3/4	12条1單位の楕鉢、備前焼。
33	5887	土師器	甕	(10.4)	1.8		7.8	10Y8/3にぶい黄橙	底面3/4	底面未切り、有明蓋
34	5887	灰輪陶器	甕	(9.7)	残5.4			5Y6/3オリーブ黄(藍色)	口縁1/6	藍・信楽焼土、内外面無輪。
35	5887	染付磁器	甕	(10.1)	5.6		(4.9)	2.5G7/1灰白(藍色)	底面1/2	口縁部外面に指込、甕付を除き全輪。
36	5887	染付磁器	徳利	1.6	残12.0			5G7/1灰白(藍色)	口縁完全	口縁部を除く内面無輪、体外部面に意匠。
37	5888	灰輪陶器	甕	(10.8)	2.0		(6.4)	2.5Y8/6明赤帯	口縁1/2	有明蓋
38	5888	灰輪陶器	甕	(9.6)	残4.7		3.8	5Y7/2灰白(藍色)	底面完全	藍・信楽焼土、高台付近無輪。
39	5888	灰輪陶器	甕	(11.6)	4.9		(4.2)	2.5Y8/3暗赤帯	底面1/2	内面吹割込、甕付を除き全輪。
40	5888	灰輪陶器	片口鉢	(15.5)	7.7		6.9	2.5Y7.6明黄橙(藍色)	口縁1/2	高台付近無輪、内外面両目録。
41	5888	灰輪陶器	甕	(6.9)	15.1		(7.0)	緑輪・敷輪	口縁1/3	甕付を除き全輪
42	5888	染付磁器	伝馬瓶	7.5	5.2		4.9	5Y8/1灰白(藍色)	底面完全	磨蝕、胴部下平無輪、輪が壊れる。
43	5888	染付磁器	小甕	(8.9)	3.3		(2.6)	2.5G7/1灰白(藍色)	口縁1/3	口縁部外面に1反中初巻、甕付を除き全輪。
44	5888	染付磁器	甕	9.6	5.4		4.4	2.5G7/1灰白(藍色)	底面1/2	甕付を除き全輪、外面2重劃手文。
45	5888	染付磁器	甕	9.3	5.7		4.1	2.5G7/1灰白(藍色)	口縁3/4	甕付を除き全輪
46	5888	焼締陶器	楕鉢	残7.8				2.5Y8/6明赤帯	口縁1/10	関西産
47	58120	土師器	埴輪	(5.7)	9.1		(4.7)	5Y8/6赤	底面1/2	
48	58120	石製品	礎	13.6	2.3		8.0	7.5Y7/2灰白	ほぼ完全	
49	58122	灰輪陶器	甕	残2.8			(4.5)	2.5Y8/4黄(藍色)	底面2/5	内外面両目録。甕付を除き全輪。
50	58122	染付磁器	甕	(10.3)	残3.4			5G7/1灰白(藍色)	口縁1/5	内外面無輪
51	58122	染付磁器	甕	残3.5				5G7/1灰白(藍色)	口縁1/10	内外面無輪
52	58122	染付磁器	甕	残2.6			(4.8)	7.5G7/1明緑灰(藍色)	底面1/3	甕付を除き全輪
53	58122	白磁	徳利	残4.3			4.3	5G7/1灰白(藍色)	底面完全	甕付無輪
54	58122	土師器	甕	残4.1				5Y8/6赤	口縁削片	
55	58123	灰輪陶器	甕	残3.6			5.1	2.5Y6/2灰黄(藍色)	底面完全	甕付を除き全輪
56	58123	染付磁器	甕	残3.5			(4.9)	2.5G7/1灰白(藍色)	底面1/3	くろわんか陶。甕付を除き全輪、外面よりノミ文。
57	58123	陶器	楕鉢	残8.2			(14.7)	2.5Y5/1黄	底面1/4	9条1單位の楕鉢
58	9区倉庫トレンチ	焼締陶器	甕	残15.0				2.5Y8/3にぶい黄	底面完全	底面に種子状のヘア様。備前焼。

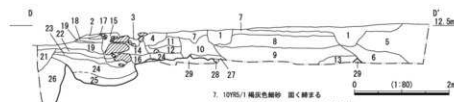
表1 出土遺物観察表



調査地位置図（姫路市2003『姫路城跡（城郭跡）』を一部改変・加筆）



1. 調査区全体図 (近世)

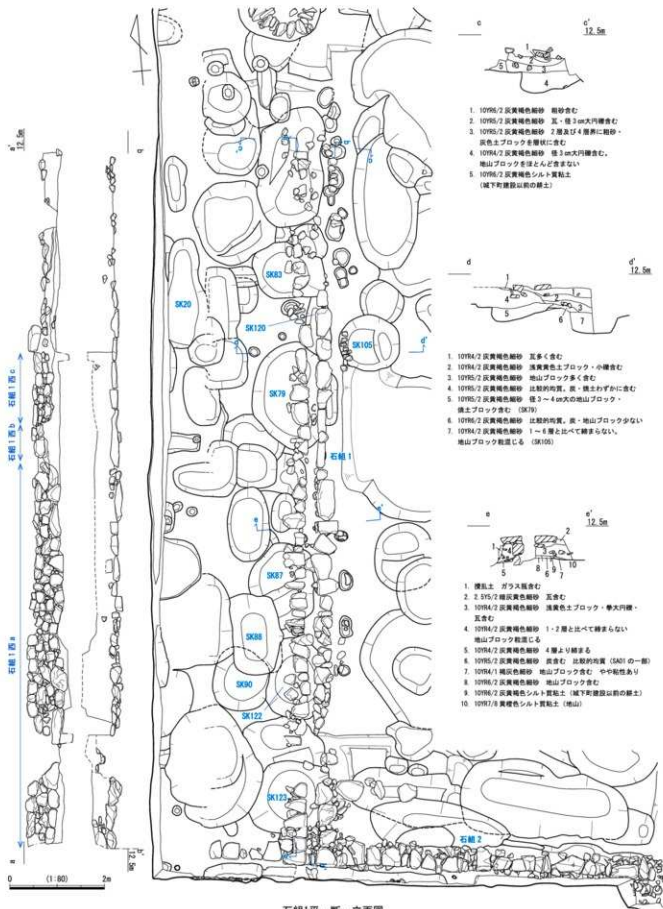


2. 西区東西トレンチ土層断面図

1. 10197/1 黄褐色細砂 雑瓦含む
2. 10194/1 褐色細砂 瓦・瓦片含む
3. 10194/1 褐色細砂 土壌が深い
4. 10195/1 褐色細砂 雑瓦が深い 陶砂多く含む
5. 10194/2 黄褐色細砂 拳天円礫・徳土含む
6. 10195/2 黄褐色細砂 流黄色土ブロック少ない

7. 10195/1 褐色細砂 面く雑瓦
 8. 2. 514/2 緑灰色細砂 瓦・徳土・漆喰含む
- 下層部に灰が埋填 ベロ錠の袋付磁器を含む
9. 10195/2 黄褐色細砂 流黄色土ブロック・漆喰
 10. 10195/2 黄褐色細砂 流黄色土ブロック少ない
 11. 10194/4 黄褐色細砂 黄色土と褐色細砂のブロックを散在に含む
 12. 10194/4 黄褐色シルト質粘土 地山寄土
 13. 10194/4 黄褐色細砂 褐色細砂土ブロック含む

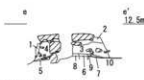
- ※遺構名は本書で設けたものに限る。
0 (1:150) 5m
14. 10194/1 褐色細砂 雑瓦が深い 流黄色土ブロック少ない
 15. 10194/1 褐色細砂 拳天礫含む (石組1の裏側)
 16. 10194/1 褐色細砂 雑砂混じる
 17. 10195/4 黄褐色細砂 褐色細砂土ブロック含む
 18. 10195/1 褐色細砂 流黄色土ブロック少ない
 19. 10195/4 黄褐色細砂 褐色細砂土ブロック含む
 20. 10195/1 褐色細砂 やや均質 流黄色土ブロックを混とんを含む
 21. 2. 515/1 黄褐色細砂 23層よりきの細かい
 22. 2. 515/4 黄褐色細砂 褐色細砂土・褐色細砂土ブロック含む
 23. 2. 515/1 黄褐色細砂 やや均質 流黄色土ブロック少ない
 24. 2. 515/1 黄褐色細砂 雑砂・小礫混じる
 25. 2. 515/1 黄褐色細砂 やや均質 地山ブロック・褐色細砂土ブロック含む
 26. 2. 515/1 黄褐色細砂 やや均質 流黄色土・褐色細砂土ブロック含む
 27. 2. 515/1 黄褐色シルト質粘土 流黄色土ブロック含む
 28. 10197/2 に近い黄褐色シルト質粘土
 29. 10197/2 黄褐色シルト質粘土 マンガン濃集 (地山)



1. 10795/2 灰黄褐色細砂 細砂含む
2. 10795/2 灰黄褐色細砂 瓦・径3cm大円礫含む
3. 10795/2 灰黄褐色細砂 2層及び4層部に細砂・灰色土ブロックを層状に含む
4. 10794/2 灰黄褐色細砂 径3cm大円礫含む、地山ブロックをほとんど含まない
5. 10796/2 灰黄褐色シルト質粘土 (城下町建設以前の跡土)

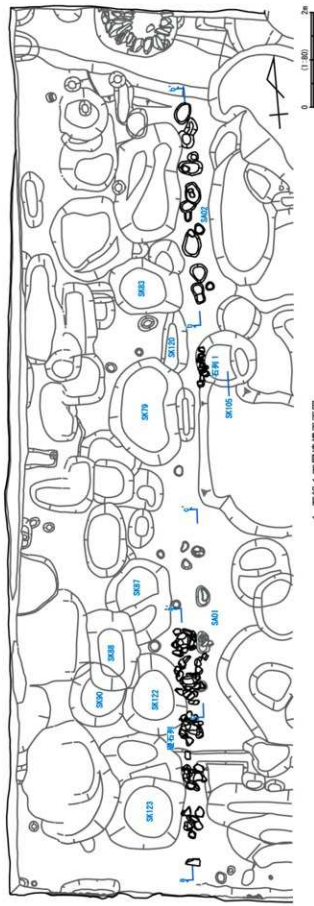


1. 10794/2 灰黄褐色細砂 瓦多く含む
2. 10794/2 灰黄褐色細砂 黄褐色土ブロック・小礫含む
3. 10795/2 灰黄褐色細砂 地山ブロック多く含む
4. 10795/2 灰黄褐色細砂 比較的均質、灰・塊土わずかに含む
5. 10795/2 灰黄褐色細砂 径3~4cm大の地山ブロック・黄土ブロック含む (SK79)
6. 10796/2 灰黄褐色細砂 比較的均質、灰・地山ブロック少ない
7. 10794/2 灰黄褐色細砂 1~3層と比べて締まらない、地山ブロック散在する (SK105)



1. 礫粘土 ガラス瓦含む
2. 2.5/5/2 埋灰黄褐色細砂 瓦含む
3. 10794/2 灰黄褐色細砂 黄褐色土ブロック・準大円礫・瓦含む
4. 10794/2 灰黄褐色細砂 1・2層と比べて締まらない 地山ブロック散在する
5. 10794/2 灰黄褐色細砂 4層より締まる
6. 10795/2 灰黄褐色細砂 灰含む 比較的均質 (SK9)の一部
7. 10794/1 埋灰赤色細砂 地山ブロック含む やや粘性あり
8. 10796/2 灰黄褐色細砂 地山ブロック含む
9. 10796/2 灰黄褐色シルト質粘土 (城下町建設以前の跡土)
10. 10797/2 黄褐色シルト質粘土 (地山)

石組1平・断面・立面図



1. 石楼1下层结构平面图



2. 碑石列平面图

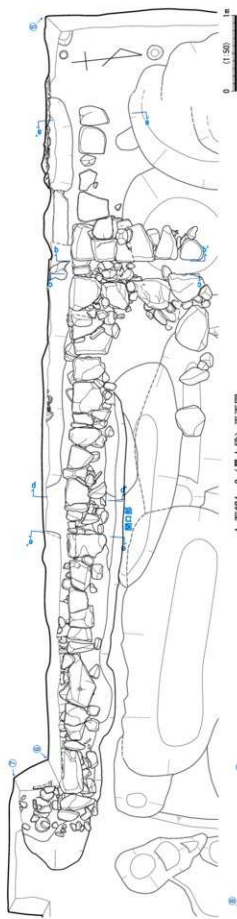


3. 碑石列断面图

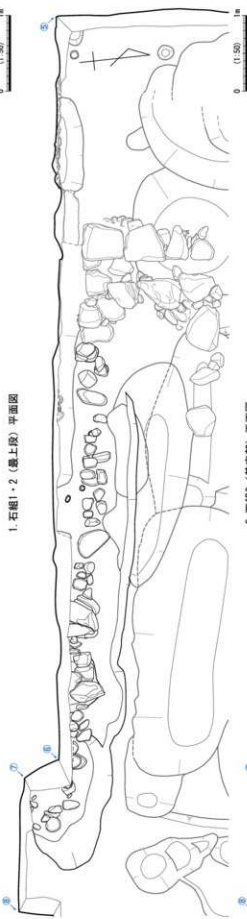


4. SA01平·断面图

5. SA02平·断面图



1. 石室1·2(墓上段)平面图

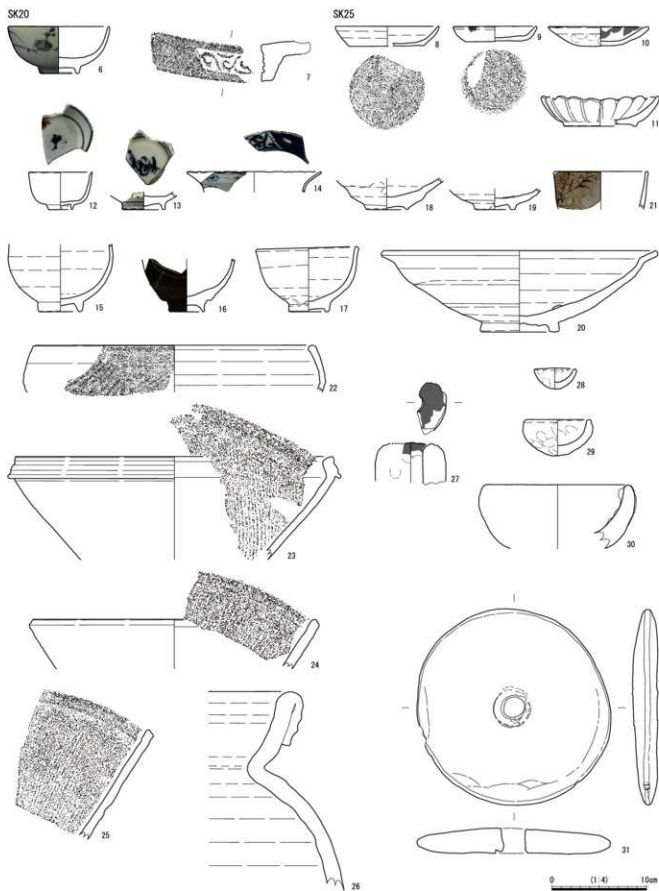


2. 石室2(墓底部)平面图



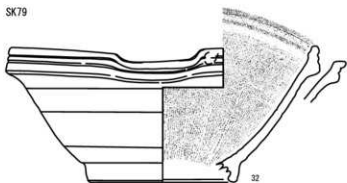
3. 石室2龙龕状况平面图

图版 8

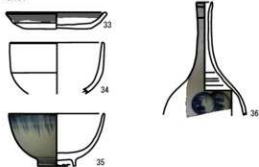


SK20・SK25出土遺物

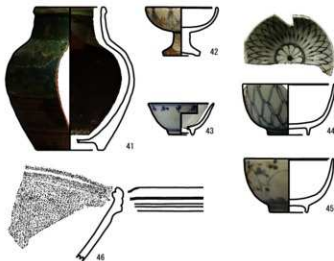
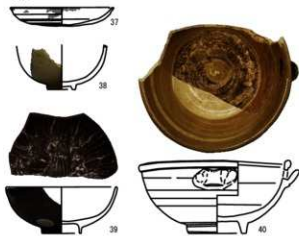
SK79



SK87



SK88



SK120



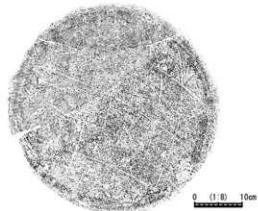
西区南端トレンチ



SK122



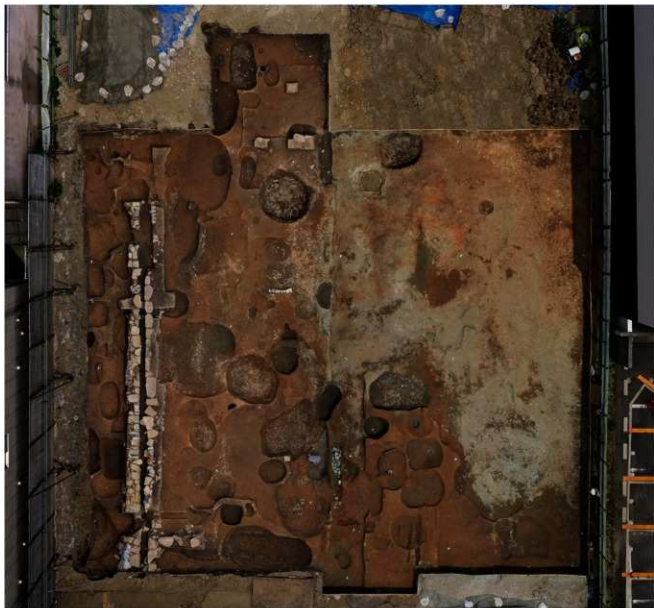
SK123



0 (1/8) 10cm

0 (1/4) 10cm

SK79・SK87・SK88・SK120・SK122・SK123・西区南端トレンチ出土遺物



調査区（第1面）全景（オルソ写真・上が北）



西区東西トレンチ土層断面（オルソ写真・南から）



東区全景（北から）



東区西壁（南東から）



西区(第1面) 全景(北から)



石組 1 (南から)



石組 1 断面 (西区東西トレンチ・南から)



石組 1 断面 (断面 d ライン・南から)



石組 1 断面 (断面 e ライン・南から)



石組1西側(オランダ写真・真から)



石組1西側(南東から)



石列1(南から)



礎石列(南から)



SA02(北から)



SA01及び石組1・礎石列・石列1除去後の状況(南から)



石組2 (東から)



石組2基礎部 (東から)



石組2除去後の状況 (東から)



石組1と石組2の交差部 (西から)



SK76及び周辺の礎石 (北から)



石組2断面aライン (西から)



SD01・SD02 (東から)

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第421次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第99集							
編著者名	南 憲和							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和2年(2020年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡	兵庫県姫路市 古二階町 77番他	28201	020169	34° 49' 50"	134° 41' 43"	2019.4.2 ～ 2019.6.28	316㎡	住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号	
姫路城城下町跡	集落跡	近世	屋敷境石列、土坑、 礎石列、柱穴列		土師器、陶磁器		20190074	
		近世以前	溝					
要約	調査地は姫路城外曲輪の「小二階町」に位置し、17世紀後半以降は基本的に町屋として幕末まで継続したとされる。町屋区画のほぼ南半を調査し、屋敷裏手の土坑が集中して検出されたことから、調査区以北に街路に面して建物が存在したと想定される。また、屋敷境の石組及び「小二階町」と「伽屋町」の境界を兼ねていた可能性のある石組を検出した。前者は18世紀後葉以降に構築されたと考えられる。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第99集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第421次発掘調査報告書—

令和2年(2020年)3月31日発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2